



小説

傲

泉

GOSEN

著 飛鳥 世一

目次

はじめに	1
ファーストステージ	2
セカンドステージ	8
サードステージ	14
ファイナルステージ	20

はじめに

さて、令和八年の新作に手を染めているのですが、現在75枚まで書き進んでいる状況です。多分、三百枚近い原稿となるのでしょうか。

ご存知のようにわたしが書く物は、このところ富みに枚数が増える傾向にあります。夢殿「秋涙」のコンペ版にはじまり、七日、VANITASとぐれをとつても長物、中編以上になる傾向が覗えます。

私自身、この傾向に関しては好意的に見ているのですが。七日とVANITASともにエンディング手前で筆をとめているのは、純文学系統に振れているがための「自分の中の落としどころ」のつけ方に迷いがある為と理解しています。

どの道書くのでしよう。

いや書かなければ納まりはつかないのです。

私小説系でもありますから、筆をとめたまま放り投げるのであれば情けない限りとなってしまいうのですから。

そんな中において、新作を書きはじめているのですが、それがこの小説「傲轟(GOSEN)」

書いていて自分が面白いと思える小説というのが、七日nanokaや秋涙以来となるのでしょうか。七日nanokaは途中で「苦しすぎて」止まってしまったのですが、この苦しさは多分私だけが知っていただければいいことなので、書くことは無いと思うのですが……

「傲轟」は所謂、御伽噺系の大衆小説に味付けとして純文学系のスパイスを効かせた作風。まあ、わたしが長く身を置いた観光界隈を舞台とした群像劇の一面も見せています。

作品が皆様の前にお出しできるのは少し先になろうかとも存じますが、是非楽しみにお待ち頂ければ幸いです。

どうぞ、早晚ここで紹介する日が来るのだろうと考えながら、今回は、挿絵から眺める「傲轟(GOSEN)」をリリースいたしました。

挿絵からストーリーを考えてみるのも楽しんで頂く一つの形かもしれませんが。

尚、原稿をアップする時はこの原稿をベースに作品を書き込んで参りますので、ダウンロードして頂いても後々無駄なることは無いかと存じます。

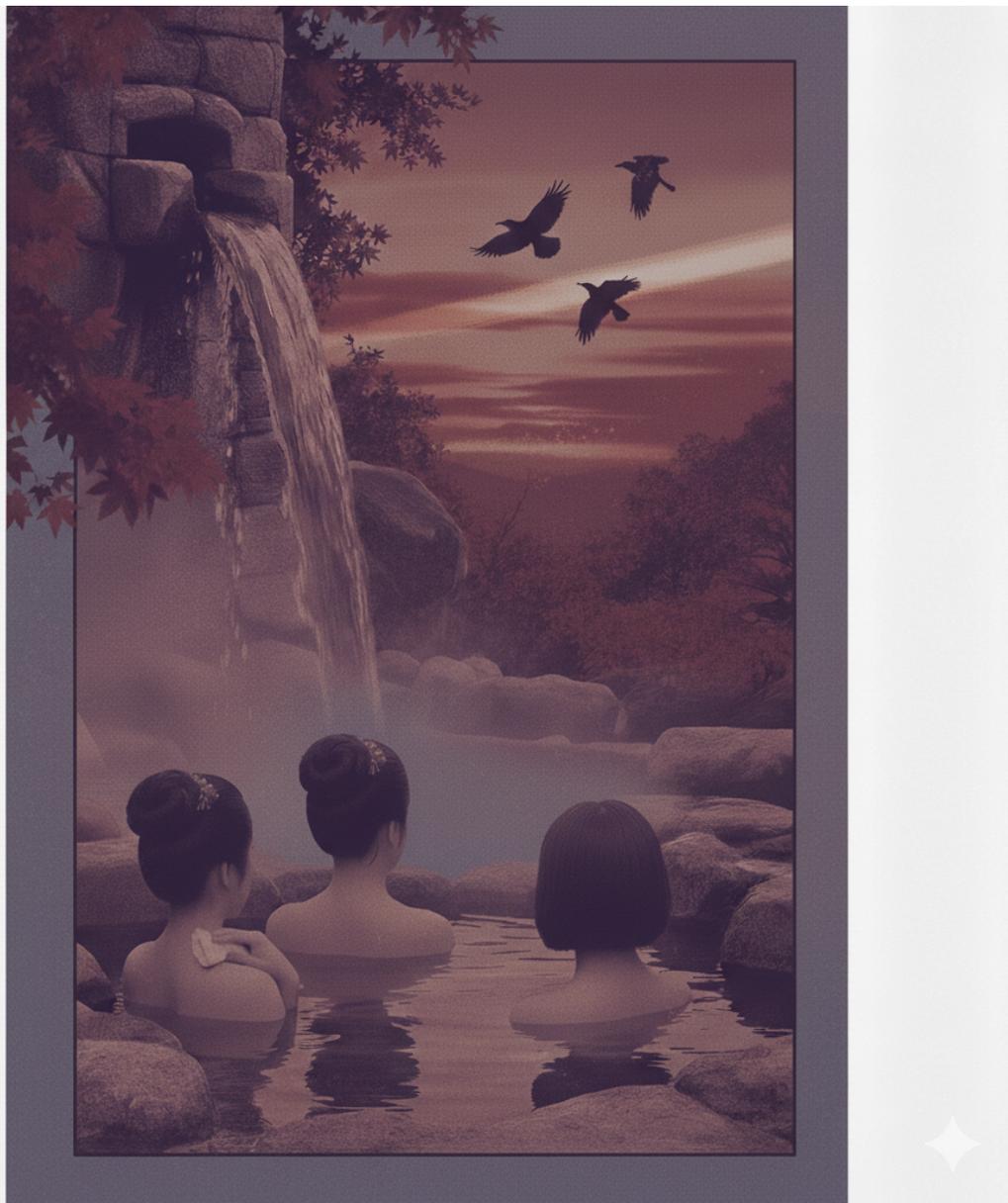
では、挿絵から眺める小説『傲轟』お楽しみくださいませ。

令和八年二月二十二日

飛鳥世一

ファーストステージ

三羽の鴉が起源とされる関西の奥座敷・有馬を舞台に紡がれる因習と伝統



和歌山の白浜温泉、愛媛の道後温泉と並び称される日本三古湯の一つでもある有馬温泉。

有馬温泉の発見にはひとつの伝説がつきまとう。

大己貴命と少彦名命の二柱の神々が、三羽の鴉がこの地の温泉の効能をもちい傷を癒やした後、天高く飛び去るを目の当たりとし、その温泉効能を見出したと伝わる。

今でもこの三羽の鴉は有馬のシンボルとして、土産をはじめ施設のあらゆるところで目に出ることが出来る。

本小説では、この鴉に物語の中心的な役割を担わせ、これにかかわる人間模様を小説とした体である。タイトルにも被せられた「轟」という字をみても分かるように、三羽の鴉、轟、三人の女が物語の要所を締める構図となっている。

この時代において毎分900Lの湧出量の温泉場というものは、関西の奥座敷として知られた有馬温泉にとって潤沢とよべるものではなく、むしろ温泉場全域に建つホテル旅館が引き込んだ大浴場にとっては伝統の枯渇を危惧しなければならない状況とも云えた。

有馬ホテル天晴での経営幹部会議の場面、代表取締役会長佐伯巖の死去が物語の伝統の終焉に拍車をかける



主要登場人物

佐伯巖 85歳(株式会社天晴代表取締役会長)

・一般財団法人 佐伯美術館 会長)

佐伯喜美子 86歳(副会長 女将会総代)

佐伯正嗣 61歳(代表取締役社長 巖の次男……)

長男は7歳で他界)

佐伯芳江 58歳(取締役副社長 正嗣の正妻本館 華有亭 大女将)

池内則男 77歳(取締役専務 総料理長)

木下晴海 29歳(取締役専務・ゲストコントロールセンターセンター長)

西田垂矢 32歳(取締役専務・別館 燐有亭 大女将)

石本麗子 31歳(取締役専務・新館 鏡有亭 大女将)

望月憲一(取締役 本館番 本部長 番頭頭(ばんとうがしら))

牧田敦也(ゲストコントロールセンター室長)

藤田公一(燐有亭 本部長 番頭頭(ばんとうがしら))

高橋光輝(取締役 鏡有亭 本部長 番頭頭(ばんとうがしら))

小暮恵子 43歳(一般財団法人 佐伯美術館 理事長)

◆益子達也 \rensuji{48}歳 画家

叔父である佐伯巖の死去の報にふれた画家益子達也が単身有馬に乗り込み目にしたものとは



セカンドステージ

伝統という名の悍ましい因習の餌食となった佐伯正嗣の妻・芳江は精神を崩壊したのである



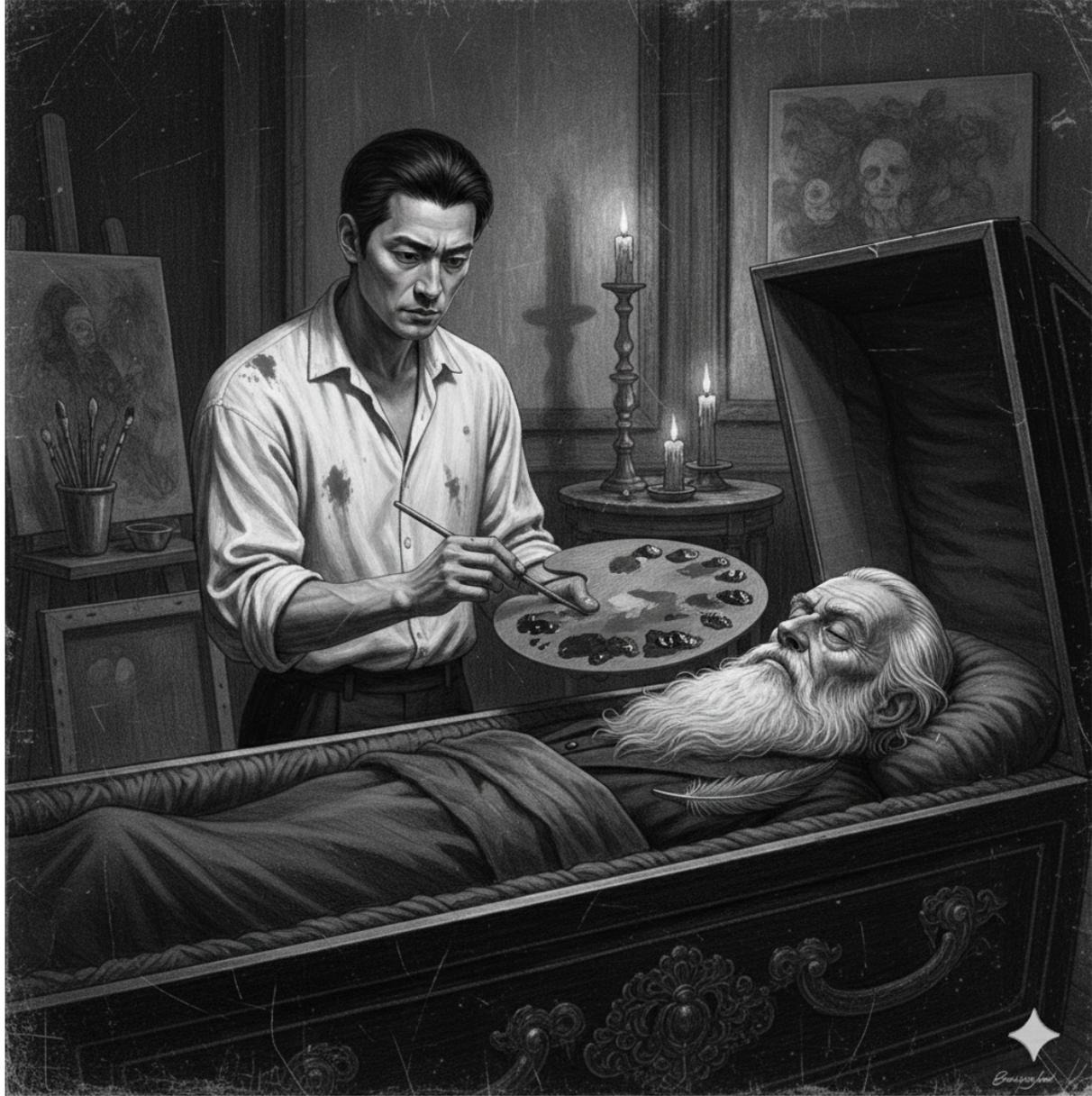
伝統という名の悍ましい因習の餌食となった佐伯正嗣の妻・芳江は精神を崩壊したのであった。

巖の懐刀は、三人の愛妾たちだった。巖の死を前に三人は協力することになったのだが。



巖の懐刀は、三人の美しき愛妾たちだった。巖の死を前に三人は協力することになったのだが。

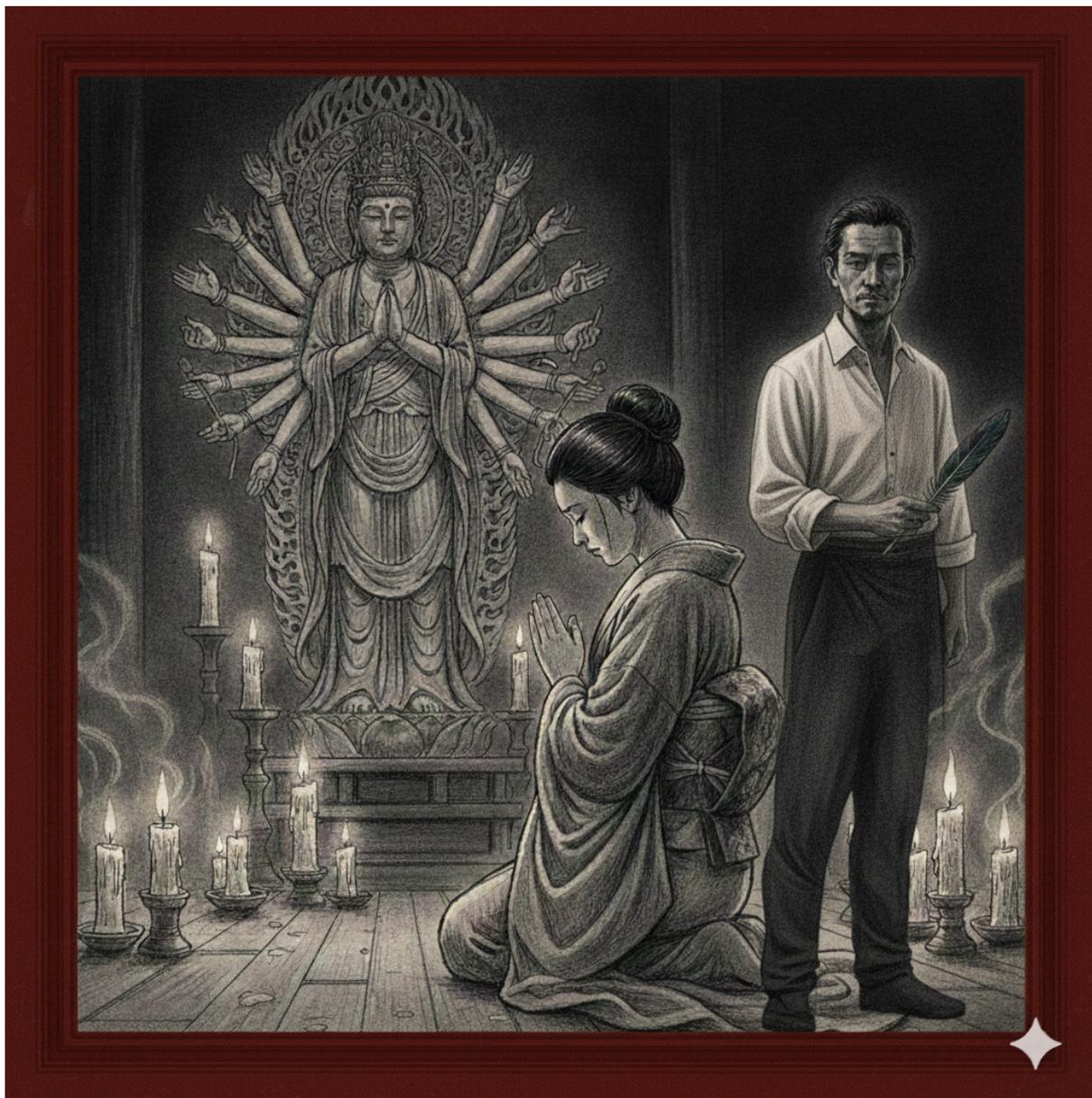
叔母の喜美子から、巖のモーニングポートレートの依頼を受けた達也だったが、そこでは思いもかけない…



叔母の喜美子から、巖のモーニングポートレートの依頼を受けた達也だったが、そこでは思いもかけない……

サードステージ

女将の一人であり、巖の愛妾の一人である麗子の元を訪ねた達也は仏の前に手を合わせる麗子と



女将の一人であり、巖の愛妾の一人である麗子の元を訪ねた達也は仏の前に手を合わせる麗子と……

美術館の理事長である恵子への接近をはかる益子達やだったが……



美術館の理事長である恵子への接近を図る益子達だったが……



専務の木下晴海も巖の愛妾の一人だったのだが、彼女の信仰はスマホの中のSNSの神「ホーリック様」だった。

専務の木下晴海も巖の愛妻だったが、彼女の信仰はスマホの中のSNSの神「ホーリック様」だった

ファイナルステージ

廠の葬儀の後に恵子と待ち合わせをした達也。そこで達也が恵子から聞かされたものは



廠の葬儀の後に恵子と待ち合わせした達也。そこで達也が恵子から聞かされたものは

これで凡ての傷は言えたというのだろうか。悍まじき因習の連鎖は立ち消えになったというのか



これで凡ての傷は癒えたというのだろうか。悍ましき因習の連鎖は途切れたというのか。
最後の最後まで……

誰が何を得て、誰が何を失ったのか。最後に笑った者は誰なのか。



伝統と因習、そして現代の病巣と闇。益子達也の今回の旅は、どんな画を仕上げたというのだろうか。

挿絵で眺める小説『傲轟(GOSEN)』

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
